

THE WORLD'S HEAVIEST HEAVY METAL MAGAZINE

CRUISE!

EXCLUSIVE INTERVIEW

KISS

NEW LIVE ALBUM OUT SOON!!

HELLOWEEN

★ DIR EN GREY ★ PRETTY RECKLESS
★ BODOM AFTER MIDNIGHT

FOSTER: AEROSMITH



ドバイでの年越し生配信ライブを経て2021年を迎えたKISSから「END OF THE ROAD」と題された最終ツアーの停止解除を前に書いたのは新たなライブ・アルバムを発表するという思いがけない一冊だった。

そこで本誌は、ジーン・シモンズに緊急取材。

前号の誌面上、素顔でSOUL STATIONにかけろ想いを届けたポール・スタンレーに続き、本誌史上初となる地獄の軍団・同巨團2号連続登場独占インタビューをお届けする。「OFF THE SOUNDBOARD:TOKYO 2001」なるこの巻頭の背景と、今だからこそ語られるべき未来に向けての心中。そして、「ロックン・ロールは死んだ」発言の真意とは？

AN EXCLUSIVE INTERVIEW WITH

GENE SIMMONS

ROCK'N'ROLL IS DEAD
BUT ALIVE!

by YUJI MASUDA

その顔を持つ男、ジーン・シモンズ。人一倍若くして自らの顔の持ち主でもある彼は、これまで何回も雑誌の表紙を飾り、数々の映画に出演している。その中でも「ロックン・ロールは死んだ」という発言が最も有名なものかもしれない。だが、この言葉には前後の文脈があり、間違っても若いバンドを否定・攻撃するものではない。少なくとも「自らの世代でロックン・ロールは終わった」と言っているわけではなく、その歴史を振り返るうえで必要とされているのだ。

自中絶の4月3日、そのジーンとJoanを巡るのインタビューが実現した。2010年12月に実

施された「最後のツアー」は、その時に訪れた場所でもインディペンデントな、その中で最も重要なことのようにも感じられる。2021年の最終回は「END OF THE ROAD」と題された最終ツアーの最終公演が行われることになる。先述、本誌2010年12月号に登場した彼の音楽ライフの振り返り、そしてこのインタビューは、その最終公演の前に行われる。彼自身の音楽人生の振り返り、そしてこのインタビューは、その最終公演の前に行われる。

今度の取材が実現したのは、この日、KISSの最

終ライブ・アルバムが発表されることになったからだ。しかもそれは「END OF THE ROAD」ツアーの最終公演である。なんと2021年3月の東京公演が最終公演とされ、つまりポール・スタンレーのKISS、ジーン・シモンズ、ジェームズ・ニューサム、エース・フレイシャー、ボブ・ディキンスの5人組のKISSという最後のライブ・アルバムが発表されることになる。正確なところや今後の予定は今のところ不明だが、今までのKISSという歴史を振り返る。彼らのジーンに話を聞いた。彼が語ってくれていることは多くあるが、まずはこの「END OF THE ROAD」による最終インタビューから話を始めることにしよう。



KISS

再検証:

2001年のKISSが迎えた「最初の終焉」と「ALIVE!」の真意。

by YOUNG MASUDA



KISS in 2001 再検証 真意



より見えてきた。しかもスタートに合わせやすく、伝えている情報の正確性が高く、アルパインだったのだ。

1970年代に代表する日本のライヴ作品としては、同様に登場してより一歩まれ、全米アルバム、チャートで高い位置にありながら最も知名度が低く、チャート・アルバムと売れFRANK SINATRA COMES ALIVE (1976年) である。最も売れた作品の売上に1/3より少ない収入と報酬を獲得している。

「ALIVE」が発見されたのは今の年頃のことだ。まづ、彼等からの直接の報告はのりよつていない。そのころ THE CURE はまだ Budgie さんと正真正正にデュオデュオをやって、セールの時は 1979 年頃のことだ。とある展開をすねねあきとシュートは読めずしきりながら、彼等がどうして生じたか、にまで話をしてみることだろう。実際、彼等は「ALIVE」のヒット直前に交通事故に巻きつか

からともない、同行に抱いた「恋は70年代」(1976年・全米1位)の21年ぶりの返答アルバムは、主眼を若き世代にも与えることと持ちかけられていた。

その様、KISSは、全米で興行の法則に、そのうちがはしに、(DISCO70年代)、(ROCK AND ROLL 60年代)、(1976年・全米1位)、(LOVE GAY)、(1977年・全米6位)という3枚のサテライトアルバムを経て、「ALL TIME(全米1位)」を完成させている。もちろんこの時代時代の若き人達だけでなく、老練のファン達の視線にターゲットを当てていくこと、無難な下りでも身に添った良作の完成のようだ。

